

Title	カロリン・ フォックス女史とジョン・ スチュアート・ ミル (ー)
Sub Title	
Author	榎本, 鉦治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.3 (1923. 3) ,p.402(90)- 414(102)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230301-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カロリン・フォックス女史とジョン・スチュアート・ミル (一)

榎本 鑛 治

John Stuart Mill は、彼の自叙傳中に Caroline Fox 女史との交際に就て一言も費して居ない。従て彼生存の當時は勿論のこと、一八八二年迄は兩者の關係を詳細に知る者は、極めて尠かつたらしい。Mill の親友 Alexander Bain が、彼の著書「ミル評論」(John Stuart Mill, a criticism: with personal recollections, 1882) に於て Fox 女史に關説した所は、僅々末尾に於ける一頁 (op. cit., p. 191) に過ぎない程である。其後一

八八八年公にされた W. L. Courtney の著書「ジョン・スチュアート・ミルの生涯と著作」(Life and Writings of John Stuart Mill) には、Fox 女史の言が屢々引用されて居る。

Fox 女史の日記は、死後 Horace N. Pym の手に整理されて、一八八二年公にされた。題して Memories of Old Friends, being extracts from the journals and letters of Caroline Fox of Penjerick, Cornwall, from 1835 to 1871. 及び W. L. Courtney の著書に引用されてある (p. 70, footnote) 所に依れば、女史の日記は二卷として公にされたやうであるが、私の手許に在るのは一卷である。或は二種の版本があるのかも知れない。

校訂者 Horace N. Pym の云ふ如く、Fox 女史の所謂友達の中には、第十九世紀中葉に於ける英國の思想界に多大の貢獻をした人が尠くない。

い。例へば Thomas Carlyle, John Sterling, John Stuart Mill の如きが是れである。故に彼等の言説は、今日(一八八二年頃の意)に於ても意義

Fox 女史の生涯を記して、次に彼女の遺稿中より J. S. Mill に關する部分を紹介することとする。

II

をを持たぬものでもない。且又過去數年間に於ける是等の記録は、一八八二年に始めて公表されたものではあるが、極めて吾々に關係を有することになる。何故と云ふに吾々は、是等の人々の思想、希望、豫言等と、其後に於て彼等の所説より生じた様々の事柄を比較することが出来るからである。然り、現代は Mill, Carlyle, Busen 及び是等有力なる一團の人々の言説をさへ學ばうと努力して居る。而して Carlyle の言ふ如く、「忠實に畫かれた人間の肖像は、總ての繪畫の中に於て、人間の壁上に最も歓迎されるものである。」(Memories of Old Friends, Memoir, p. xxvii)

Caroline Fox 女史は、一八一九年五月二十四日 Falmouth に生れた。彼女の兩親は、單に古いクレーカー教徒の家系によつてのみならず、又豊かなる美はしい心の持主として有名であつた。女史の一家一門は、Falmouth 附近に一群の美はしい住家を建てた。是れが繪のやうに美はしく、又花樹の豊富であつたがために、旅人の眼を惹いたものである。殊に美はしいのは、Falmouth を距る凡そ三哩の地に在る Penjerick の建物である。是れこそ、女史と女史の兩親とが非常に愛好した建物であり、又夏季の住家であつた。

先づ順序として私は、極めて簡単に Caroline

女史の父は、傾角計(Deflector Dipping Needle)

の發明家であつて、夫れは爾來北極探險の際に必ず用ひられて居る。一八七七年彼の死するや、英國王立學會(Royal Society)の會長 Sir Joseph Dalton Hooker は、大會の席上に於て曰く、「Fox 君は、氣溫と地球の内部に於ける、殊に鑛脈の系統に關する電磁器の狀態との研究を以て著名であるが、彼は各種の發明家であり、且今日各地に於て地磁器の性質を確證するに用ひられて居る各種の器械の改良家でもある。」と。

Schimmelpenninck 夫人の話に依れば、女史の父 Robert Were Fox は動かされざる眞理と榮譽、清き良心、冷靜の研究的理性、及び抵抗し難き力を有した。之に反して女史の母 Maria は科學的趣味こそなけれ、立派な母であつて、常に子供等に情愛ある注意を向けて居た。

Fox 女史も亦一般クエーカー教徒と同様に、清淨さと、學問を愛することと、眞理の追求と

の美點を有して居た。女史の幼時は、人並外れて利發であつた。Schimmelpenninck 夫人の話に依れば、「Caroline は敏活であり、懷疑的であつた。併し惡戯も仲々やつた」と云ふ。女史の體質は、多少虛弱の方であつたから、小學校には通はずして、母と家庭教師との手に教へられた。併し女史は、頗る氣難し屋であつたが、何時しか自己の教養に役立つものが獨習の方に在ることを覺えた。殊に Coleridge の作を愛讀した。

他面に於て Fox 女史は、社交的性質を帶びて居て、父の友人達の會話を日記に記して置いた。是れは、女史の迎へ得る思索の世界を尊信し、評價する結果であつて、賢人の言説に耳を傾け、又彼等の言葉を心中に貯へるに努めた。

女史の常に口にする所は、

「若し私が自分の時間を割いて會談を共にす

る人々を撰擇するとしたならば、夫等の人は確かに、自分自身を速やかに且明かに會得させるに努めるやうな人でなければならぬ、のみならず彼等は、私を理解する辛抱と好奇心を持つ者であらう。一度親友に告げるに足る思想が、私達の間に生じた時には、親友に信じさせるに殆んど何等の勞心を用ゐない。」

と謂ふのである。是れは彼の Sir Richard Steele の言である。

Fox 女史は、二年に一度倫敦を訪れて四五日滞在するのを常とした。斯る際には必ず女史の唯一の兄 Robert Barclay Fox と、姉の Anna Maria とが、同行した。此旅行は、女史に取て非常に愉快なものであつた。

Horace N. Pym の言ふ所に依れば、Fox 女史の日記を読む價值あるは、女史の性格其物が如何に迅速に形造られたかを知ることが出来る

からである。即ち女史は、周圍に集れる人々に心を奪はれ、其言を反省し、又之に同化したのである。精神高潔な少女の花々しい時代に次で、女史は直ちにより大なる知識及びより圓熟せる年齢に相應はしき哲學的精神を迎へた。然るに女史は、日一日と親友や知己を失ふのを見て、明かに日常生活の潮流を深くし、又廣くしたが、遂に唯一の兄の死に遭遇するや、其極點に達した。此時女史は哀傷的に叫んで曰く、「今や私は誰のために吾が生涯の記録を執筆す可きであるか」と。而も是れは、女史の餘命の幾何もなきことを知らせるのであつた。

Fox 女史の精神的生活を見るに、夫れは女史の日常に於ける信仰の強い實在である。而して女史のより高尚な意思に恭順なることは、愈々確信となり、又満足となつた。

女史の貧者及び病者に對する能動的同情心

は、力強く養はれて居た。今一八四一年七月十四日の日記を見ると、

「私の考へる所では、貧者と病者などを救済することは、有益な事業である。さうして夫れは、信仰が衰退する近き將來に於て、より明確に眞の信仰の閃きが私の靈魂の中に輝く所の努力を呼起すであらう。故に私は、一八四〇年の夏及び秋に於ける私の心の状態を多少記す積りである。」

私は是迄、最高の意義あることを、其實在を意識せずに、是認する所が大であつたやうに思はれる。さうして私は是れを、事物の非常に不健全なる状態であると知つて居た。此意識は、専ら Calvert 醫師が至高の眞理に於ける單なる傳統的信仰の無價値に關して告げた、嚴肅なる數語に依て、喚起された。私が今日或主要なる教理を信する幾多の理由を探求すれば、する程

私は、懸念を以て充たされ、又躊躇させられたのである。そこで私は、眞理を學ぶに如何程高價を費すも、夫れを教へられるのを非常に熱望した。

Thomas Carlyle は、私の心の状態を巧みに諷して、『世人の信することを信じやうとする或人の痙攣的努力』と云つた。併し夫れは違うであらう。私は、私自身及び私の神と共に、不正な役割を演じて居ると思つた。私は、基督を媒介者及び典型者として充分信仰したが、併し私が基督を救世主として是認することは、私の理性に反した所である。而も此時に私が唯一神教徒にならなかつたのは、私は教理の眞理を研究することが出来なかつたにも拘はらず、尙ほ夫れが眞理であり、且私が或は祈禱し、或は讀書し、或は沈思して、熱心に又眞面目に夫れを追求し續けたならば、私は自分で夫れを知ることが出

来る筈であると云ふ完全な確信を持續けて居たからである。Hender Molesworth が或日偶然私に告げた言葉は、悲嘆と、奮闘との此時を通じて、私に慰安の曙光を屢々與へた。彼の曰く、『信仰の缺乏は往々、さもなければ一の試練をすら持たぬであらう所の人々に許容されると思ふ。何故と云ふに汝も知る如く、信仰の缺乏は、非常に大なる試練であるからである』と、私は、彼の言の眞理であることを遂に彼に告げなかつた。

私は、或時禮拜の際沈思した後、神は神の靈魂を以て私達に語るのであると信じた。私は、私が正しいと知り、又より光輝ある日を期待する所のことに和同して、一層基督のやうな生涯を送らうと努めた。

私の精神的生活に於ける次の時期は John Stevenson が私に與へた聖バオロの達希伯來書第

十章の解釋であつて、私は之を許容することが出来た。其際 Stevenson は、私達が全然法を履行することの不可能であつて、之がために被むる私達の死罪のあることを告げた。私達は、最早罪過を取除く可き牡牛や山羊の血液の效力を信じなかつた。然らば私達は、神の永久的憤怒を逃れる希望を何の上に打建てる事が出来るか。私達の救済に關する眞の懸念を此點にまで齎らす時、私達の眼は、罪過に對する唯一の永久的犠牲として吾身を捧げた基督を見るやうに慈悲深く開かれるのである。さうして私達の贖罪の條件として、往古の猶太人の犠牲に於て経験された信仰は、基督其人に譲渡され、又集中されなければならぬと云ふことを要求するのである。斯の如く法律は、私達を基督に誘ひ、又犠牲に於ける信仰を私達に教へる所の先生であつた。而も其完全なる意味を顯示するのは、

基督のみであると謂ふに在る。私は、當時に於て此話に非常な興味を持つて居たが、其後幾何もなく忘れるやうになつてしまつた。

私は、物悲しげに又物思はしげに、Penroseまで散歩した。ようして其歸るや、Tiefelsdröckhの恐怖壓倒論が、私の眼前に強く且明かに現はれた。そこで私は獨語すらく、『何故に斯の如く私は、不信仰の悲惨な暗示に干渉し、而も基督が長い間私に提供して居る所の驚く可き贈物を無視して、下界に於ける力の勝利を誇るやうに助力しなければならぬか』と。基督は、彼を信仰する總ての人の救済者であることを、私は知つて居る。さうして私は、基督を信仰し、且不信仰と争ふのに基督の援助を仰ぐ。私の疑惑と困難とは、直ちに空虚となつた。さうして私の心は、疑惑や困難から、速かに且完全に救済されると云ふ幸福な豫期に充滿した。翌朝私は、

John Stevenson の註釋の一部を日記に認めて居る時、其眞理が、明白に、強く、且赫々ど、云ひ盡されぬ程愉快に面前に現出した。從來特に私を困惑させた或基督教的教理の全理性は、今や眞晝の太陽の如く明白に輝いた。さうして許與された多幸の光明に對して私の覺えた感謝は、強烈なものであつた。私は何れの點に於ても、私の心の上に及ぼす聖靈の作用を是認することが出来た。何故と云ふに私は、從來屢々、種々の議論を読み、且聽いて、夫等の議論を、今私の心に斯くも明確に話掛けられた議論と同様に、決定的であり、又洵に時としては同一であるとしたからである。併し是れは、其正當な感化を與へた時に過ぎなかつた。

私は決して、今迄私の經驗して來た困惑と、疑問と、難儀とを悲しまない。夫等の事は、他人に對する私の寛容さを増し、さうして若し基

督教徒の希望を充たす所の光榮ある眞理が唯だ受動的にのみ吸収されたならば、私が感知し得たものに比して、夫等の眞理に對する遙かに高い價值と、遙かに深い感動とを私に與へて居るのである。故に夫等の眞理を私自身のものとしなければならぬと云ふ苦闘は、將來の不信仰を妨げるために、私の記憶の中に生じなければならぬ。さうして私達に許與されて居る信仰の度合が、全く天上よりの贈物であつたと云ふ確信は、熱心に又忠實に私を導いて、私自身並に他人のために、『神よ、私達の信仰を増さしめよ』とてう懇願へ赴かせるのである。

右は、J. O. M. 女史の一八四一年七月十四日附日記の大意である。以て女史の弱者に對する同情が那邊より生じて、如何程強大なものであつたかを、察することが出来ると思ふ。然るに女史の基督觀は、一八五五年四月十三日附の日記に

は、下の如く附加へられた所がある。曰く「扱て私の最近に於ける確信は、基督の自發的犠牲が行はれたのは、神の憤怒を鎮めるためではなく、寧ろ同胞に對する基督の無限の愛著を言著はし、斯くて同胞を基督自身に和合するためであつたと謂ふに在る。即ち凡ゆる種類の犠牲は、基督に接近することであり、又基督の嘆美する所である。さうして基督が同胞より彼等の至誠と愛著との證據として要求する所は、彼等同胞自身の意思をば、基督が永久的典型である自己犠牲てう基督の意思に服従させることに在る。斯くて基督は、彼等同胞に賦與するに、基督自身に依てのみ指導せらる可き意思と力とを以てするのである」と。

續いて一八四四年及同四五年は、J. O. M. 女史に取て一大悲嘆の時期であつて、日記にも白紙の儘の所が尠くないさうである。翌一八四六

年女史は、兄 Robert Barclay Fox 夫妻と共に瑞西に旅行した。一八四八年女史は血管破裂に苦しめられた。其後一八五四年二月兄 Robert Barclay は、保養のために英國の土を離れて埃及に赴いたが、翌三月 Cairo の近くで永眠した。思へば前月女史が Southampton 迄見送つたのは、兄妹最後の告別であつた。女史が兄の永眠を非常に悲んだことは、既に記した所であるが、當時女史が一人の従弟に送つた書信を見ると、如何にも其有様が眼前に現出するやうである。今其一節を引用するに、

「私達は、Robert Barclay Fox と云ふ名が、決して私達の中より除外されないであらうと云ふことには、一致して居る。さうして私達には、其處に Robert Barclay Fox が今迄よりも生々ど、又勢ひよく現はれるやうに思はれる、彼は天國へなど追放されないであらう。噫々、汝を

著の天蓋」が、私達双方の上に在るので、唯だ私達は、全試練を光榮あるものとし、又夫れを極めて神聖なものとしなければならぬ所の、美はしき慈悲に對して、私達の神と救世主とへ感謝することは、長い／＼月日を要するであらうと感ずることが出来るに過ぎない。云々」

其後一八五八年 Fox 女史は、母を失つた。一八五九年の春女史は、父及び妹と共に羅馬と Naples とを訪れた。一八六〇年義姉(兄 Robert Barclay Fox の妻)が佛國の Pou 市で歿したので、四人の孤兒は、Penjerrick へ歸つて來た。之がために女史は、悲しみも加はりはしたが、夫れを償ふに餘りあつた。斯くて數年間女史は、不斷の注意を以て四人の甥姪の養育に全力を盡した。

一八六三年女史は、墨其西哥の Matamoros 港の自由に關する委員會へ出席する父と共に、西

愛する人々より離れると云ふやうな記憶を、何うして私達は、抱くことが出来やう。Barclay 就て忘れて宜いと云ふことは殆んどない。總てが、感謝と愛著とを以て思出さる可きである。是れは、何れも空想であり、妄想であるかも知れないが、私は兄が十億萬土の彼方へ行つたとは考へられない。さうして私は、兄のことを考へても悲しくない、何故と云ふに私達の一人は、無事に彼方へ上陸し、凡ゆる辛苦と惡闘とは終了し、競争の目的は到達され、而も神は兄の救済を光榮として居ると云ふ意味が、如何にも刺戟的であり、鼓舞的であり、獎勵的であるからである。噫々、總てが非常に不可思議であり、又多幸であるから、私は愁傷の間暇を持たない。私は、死の糸が兄のためのみならず、又私達のためにも、斯くも見事に取除かれやうとは、想像することが出来なかつた。確かに同一の「愛

班牙へ赴いたが、此地で女史は甚だしく健康を害した。一八六六年女史は、Venice に赴いたり、巴里大博覽會の見物に行つたりした。併し先年害した女史の健康は、未だ充分恢復しなかつたので嚴寒には殊に悩まされた。勿論女史は常に病弱であつたのではない。單に慢性氣管支炎に悩まされた丈けである。一八七〇年十二月二十五日女史は、積雪を踏みつゝ附近を散歩して、太陽に輝く雪景色を賞讃したが、同行の友達は、女史のために雪解の空氣を氣遣つた。夫れは、濕冷の空氣が女史に禁物であつたからである。果せる哉、之がために女史は、病床に親しむ身となり、遂に戶外の散歩を楽しむことが出来なくなつた。一八七一年正月女史は、新年の廻禮中感冒に罹り、寄る年波に病氣に對する抵抗力を失ひ、同月十二日不歸の客となつた。(Memo-ries of Old Friends, edited by Horace N. Pym,

Memoir, pp. xv-xxvii)

右は、Fox 女史の生涯並に性質の概要である。而も女史は、終生獨身であつた。故に女史を呼ぶには、W. L. Courtney の如く Miss Caroline Fox とはねばならぬ。(Life and Writings of J. S. Mill, p. 70) 然るに Horald Hoffding 博士の大著「近世哲學史」の邦譯には、カロリン・フォックス夫人となつて居る。是れは、譯者の不注意と許りとは云へないが、間違なのは事實である。(北畠吉氏譯「近世哲學史」下巻、四八八頁參照) 尙ほ私は、參考までに英譯書を調べた所、何れも單に Caroline Fox と書いてあつた。(Dr. Harald Hoffding, A History of Modern Philosophy, translated from the German edition by B. E. Meyer, vol. II, pp. 395, 400, 402) 然らば Fox 女史と Stuart Mill との交際は、何時頃に、又如何なる理由にて結ばれたのであ

るか、夫れは項を改めて記す。

三

John Stuart Mill と Caroline Fox 女史との交際が始まつたのは、一八四〇年三月十六日である。(W. L. Courtney, Life of J. S. Mill, p. 70) 是れより先は John の弟 Henry (James Mill の三男) は、肺病療養のために、Falmouth 附近の Terrace に在る旅館に逗留して居た。一八四〇年二月八日附の Fox 女史の日記を見ると、此日 Mill の母、即ち James Mill の夫人 Harriet Burrow が、次女 Clara と三女 Harriet とを伴つて、Henry の看病に來た。Fox 女史の母と兄の Robert Barclay とは、既に Henry Mill と面識を交へて居た。女史の母も兄も、Henry を指して、大變奇麗な青年で、彼の輪廓と云ひ、色艶と云ひ、如何にも優美な上に、彼の聲が頗る音曲的であるから、殆んど精氣のやう

(ethereal)だといふことを記してある。(Memories of Old Friends, p. 54)

二月八日以来 Fox 女史は 度々即ち二月十七日、十九日、二十二日、二十三日、二十四日、二十七日、二十八日、三月一日、等に John Stuart Mill の妹 Clara Mill を伴つて近傍を散歩した。二月十九日の如きは、John Sterling と共に、女史は、吹雪を冒して Penance 方面へ赴き、地質を研究したり、山登りをしたり、Cornwall の鑛山生活を見物したりして、Clara を喜ばせた。女史の友人 John Sterling は、當時胸病療養のために Falmouth に滞在して居たのである。彼は、一八二八年倫敦の思索會 (speculative society) に於て以來、Mill を知つて居たので、彼は女史に、Clara Mill の長兄 John Stuart Mill が非凡な力と天才との所有者であり、形而上學に於ける新學派の創設者であり、又非常に

魅力のある、論客であつたといふこと云ふ。

(Memories, pp. 54, 56, 57, 53, 60, 61, 65, 66: J.

S. Mill, Autobiography, pp. 128, 154-155: W.

L. Courtney, Life of J. S. Mill, pp. 59, 70, 73,

74: 今泉、石田兩學士共譯「ミル自叙傳」一八二

頁、及二一七頁乃至二二三頁參照)

Fox 女史の三月十六日附日記には、次の如く記してある。

「Henry Mill の長兄 John Stuart Mill が來たので、私達に紹介するために、Clara が彼を連れて訪ねた。彼は、餘り見受けない容貌の人で、即ち彼の顔付は、精巧に彫刻された中に鋭敏さと、感受性とがあつて、今私の記憶する所では、何人よりも瑞西の神學者且骨相家 Johann Kasper Lavater の肖像に似て居る。彼の音聲は、云はゞ優雅其物であつて、彼の言方は、如何にも音聲と容貌とに適合して居る。彼は私の兩

親と無言のまゝ握手した。然る後に篤く款待の好意を謝した。彼の曰く『諸事萬端、如何にも整へり』と。Henry Millは、物靜かに兄を迎へて、暫らく兩人は、大變面白く又慰められたらしく、物語つて居た。醫師の Bulmore が來られたので、彼は他の人々を室外に遠ざけて、弟Henryの容態を問ふた。醫師は答へて、『さあ、多分午前中位は持つでせう』と云つた。然るに午前中は無事に過ぎて、Henryに別條がなかつたので、Millは醫師に向つて、『君の豫言は的中しませんでしたねえ』と云つた。(Memories of Old Friends, p. 69)

右が、Fox女史のJohn Stuart Millとの初對面に關する女史の記述である。兩者は、此日より次第に親密な交際を結び、種々の問題に就て討議を交へるに至つたのである。次號に私は、Fox女史の日記を追ふて、其詳細を紹介するで

觀乃至人生觀が、經濟學說の背景を爲せる時代である。宇宙には其創造主たる神の明示或は默示する自然の秩序が有り自然の法則が有る。此秩序法則を透見して是に適應する順路を歩む事が、總て人類全般の福祉を増進し神の理想を實現する所以である。現世に瀾漫せる凡百の慘禍は、人爲の法則が自然の法則を攪亂せるに起因する。故に一切の拘束を撤去して、簡明なる「自然的自由の法則」を顯現せねばならぬと云ふのが其論旨の主要である。彼等に取つては自然なるものが則ち善なるものであつた。随つてそれは、萬有が夫々神の豫め定めたる究極の目的を具有すと觀る目的論の見地に立つて、事物を觀照するものでなる。是に反して後期は斯かる形而上學的先驗的前提を悉皆排除し、快苦の計量を基礎とするベンタム流の功利主義哲學が、經濟學と緊密なる提携を爲せる時代である。ベン

あらう。

「人口論」の哲學思想

津 田 誠 一

正統派經濟學は其搖籃の時代に於て、本質的に相異なる二種の哲學の影響を享けた。随つて此學派が經濟上の自然主義、換言すれば自由放任の提唱を以て、其恆常の綱領を爲すは周知の事實に屬するも、其究極の源泉たる哲理的論據に遡及する時は、人々に依り自ら異同を存し又時期に應じて之を二期に大別する事が出来る。前期は即ち古代希臘の自然法説と中世以降の基督教思想の抱合に依つて生じたる自然神學的世界

タムに従へば、「自然は人類を快樂及び苦痛と云ふ二個の主權者の配下に置いた、吾人が何を爲さんとするかを決定すると共に、又吾人が何を爲さねばならぬかを指示するものは唯此兩者のみである。」功利の原理とは此心理上の事實の認識に基き、「如何なる行爲にもあれ、是に關聯する人々の幸福を増加するか若しくは減退するか傾向に依つて、該行爲を或は善として或は惡とする原理である。」「功利とは其關係者に便宜、利益、快樂、福利即ち幸福を賦與し(是等の語は此場合總て同一物である)、若しくは災禍、苦痛、害惡、即ち不幸(是等の語も亦同一意義である)の發生を防止する所の事物の性質を云ふのである。若し其關係者が公共團體なる時は功利は公共の幸福を意味し、特定の個人なる時は其個人の幸福を意味するものである。」而して「謂ふ所の公共とは、其成員なりと看做さるゝ個人